

【論文】

マルタン・デュ・ガールの作品に見る
ふたりのユダヤ女性

—一つの序章—

店 村 新 次

序

ロジェ・マルタン・デュ・ガールの既刊作品中の二大傑作『ジャン・バロワ』（一九一三）と『チボー家の人びと』（一九三二—三九）という長篇小説のなかを、後述するような意味で重要な役割を果たすユダヤ女性がそれぞれひとり、主人公の一時の恋人としての鮮烈な姿を閃かしたのち、まるで「さまよえるユダヤ人」^{（註1）}が性を転じて過つたかと思ひ紛うほど、忽然として消え去るごとく通り過ぎてゆく。しかもこのふたりの作中人物の性格や振舞い、そして主人公に及ぼすその影響が両者酷似しているのみならず、「主人公（ジャン、アントワヌ）——恋人（ユダヤ女性）——蔭で無気味に糸をひく奇怪な情夫（ゾジェ、イルシュ）」という一種の三角図的構成、またそこに付随的にまつわる近親相姦テーマのエピソードなどに、作者の意図にあらざれば何か抜くあたわざる潜在観念の周期的現れとしか思えぬほどの類似が看取されるのである。

以下本稿では、この二つの主要作品を中心に、それに処女作品『生成』(一九〇八)および傑作中篇『老いたるフランス』(一九三三)に登場する異国趣味の恋人たちをも含めて、それらが見せる類型に思いをいたし、それが作者において何を意味したのかを考察してみたいと思う。さきに決論を述べることになるが、このユダヤ女性の問題を解明することは、作者が当初からいかばかり、『老いたるフランス』という作品標題に象徴されるような牢固たる因襲的フランス社会を告発せんと望んでいたか、を思い知らされることになる。そして、右に示した三角図的構成が、恐らくは「さまよえるユダヤ人」という伝承と、ファウスト——マルガレーテ——メフィストフェレスという原型の流れを汲むらしきことを知らされて、西洋におけるこの種の問題の根の深さに驚かされるのである。なおこの後者の問題については、幸運にも出遇うことを得た Luce A. Klein の著書の論旨を紹介することになる。

『ジャン・バロワ』のジュリアの場合

元来この作者の長篇小説はいずれも、呈示部、展開部、終結部とでも言うべき一種の三部形式をとる。その典型的な形が処女作品『生成 Devenir』の第一部「欲求する Vouloir」第二部「実現する Réaliser」第三部「生きる Vivre」という構成とその標題に象徴的に示されていたことを、筆者は度々指摘してきた。そしてそのうち中核となる第二部はつねに、主人公がみずからの殻を破って社会と接触し、その理想を行動に賭ける、小説の山場とも言ふべきクレッシェンドの部分を構成する。ドレフュス事件という題材を中核にもつ『ジャン・バロワ』においても、青年教師ジャンが妻と教会とを捨てて過去の絆を断ち切り、単身社会に飛びだすところまでが第一部であり、「種蒔く人」を創刊し、ドレフュス事件に介入して闘うジャンのクレッシェンドの壮年期が第二部、そしてドレフュス事

3 マルタン・デュ・ガールの作品に見るふたりのユダヤ女性

件がおさまり、老境にのぞんで、ジャンがまた妻と宗教とへ戻るデクレッシェンドの部分が第三部である。そして問題のユダヤ女性ジュリアは、その第二部の初めのジャンが行動に乗りだす重要な場面において登場する。『チボー家の人びと』のユダヤ女性ラシエルがやはり『チボー家』の第二部とも言うべきアントワヌの人間開眼の場、そして冒険に身を挺してみずからの力をはじめて確認する重要な外科手術の場面に登場するのと、機会的にも相呼応するものがある。

家を捨てパリに出たジャンを取り囲む「種蒔く人」のグループの或る会合で、ドレフユスが無実ではないのかという漠たる疑問が初めて提起される。その直後ジャンは仲間のひとりたるユダヤ人ヴォルズムートに是非自宅に来てほしいという懇請を受ける。ヴォルズムートは生命の再創造という途方もないことに凝っているが（ここにユダヤ人を錬金術や魔法と関係づけた中世以来のユダヤ人観の一つの名残りが見られる）、いまは病床に横たわっている。そこへジャンが訪れるのであるが、ジャンにとって思いがけないことに、独身と思ったヴォルズムートの家にはひとりの若い女性がいた。ヴォルズムートの姪にあたる二十五歳のジュリアである。このような女性主人公の登場のさせ方も、『チボー家』のラシエルが手術場に偶然いあわせたという状況とよく似ている。ジャンが訪れたとき、ジュリアは懸命にタイプを打っていた。そして、屈託のない、むしろ大胆で開けひろげた女性としての相貌を最初から示す。

D'un geste décidé, elle indique à Barois l'unique chaise de la chambre, et, sans gêne aucune, s'accroupit sur l'un des lits défaits.

ジュリアは、叔父がまだ眠っているからと言ってジャンを待たしているあいだ、叔父の研究などについて、ジャンと話し込む。その間のジュリアの所作は、その性質をよく浮き彫りにして興味深い。

Elle est accoudée au milieu des draps, les jambes croisées, et elle le dévisage librement, d'un regard sympathique et sans équivoque.

そのような風変わりなほどこだわりのない娘を前にして、ジャンは思わず

Etrange créature

と独り言を言う。このようなジュリアの性格も、後述するような『チボー家の人びと』のラシエルと同系の人物だという感を深くさせる。

やがて、叔父の呼ぶ声がして、ジュリアはジャンを叔父の寝室へ通す。その寝室に通ずる戸口で、マルタン・デュ・ガールが『老いたるフランス』のような自由潑瀾たる作品でよく見せる、簡潔でしかも意味深長な暗示に富む数行の描写がわれわれを驚かす。

L'embrasure est étroite. Elle ne semble pas s'en apercevoir: aucun mouvement féminin de retrait.

Au contraire, elle avance la tête, si près qu'il sent son souffle sur sa joue.

この暗示的で秀逸な数行に注釈をほどこすことは、ほとんど不可能でもあり無益な仕業でもある。ただわれわれ

はこの鋭い描出によって、やがてジャンとジュリアが愛し合うことになるであろうことを予感させられる。

またこの時の叔父のジュリアに対する態度も謎めいて描かれている。これはやがて明らかにされる叔父がジュリアに寄せる近親相姦的な感情（これもマルタン・デュ・ガールの作品に頻出するテーマ。その典型的なものが『アフリカの告白』（一九三二））に対する伏線となる。

やがて叔父のヴォルズムートとジャンの会見となり、ここでヴォルズムートはジャンにドレフユスの無罪を強く訴える。そして是非「種蒔く人」の思想的指導者ともいべき Luce とドレフユス派の指導者のひとり Bernard Lazare との会見を実現して欲しい、とジャンに強く申し入れる。因みにこのラザールは実在の人物であり、リュースとラザールの会見が小説の中で重要な事件として行なわれることになるのだが、作者は要心深くこの会見の模様を、一通のリュースからジャン宛ての手紙で済ますという手法をとった。（実在の人物を虚構の中に採り入れる際のこの巧妙にして慎重な配慮は諸家のひとしく指摘するところであるが、こうした手法はドレフユス裁判におけるゾラの姿を描く際にも使用されている。）

さて問題はジュリアである。ジャンはジュリアの叔父ヴォルズムートとの会見以後、真剣にドレフユス事件と取り組んで行くことになるのだが、この最も大切な転機に当たって、すなわちジャンが勇を鼓して行動へと跳躍を試みるその転機に当たって、美しいジュリアの存在が大きな役割を果たしていることに注目せねばならない。それは『チボー家の人びと』の『美しい季節』において、アントワーヌが内科医でありながら、緊急の外科手術を負傷した少女に施すという、行動への重大な決意を固めるときに、かたわらにランプを持って寄りそっている美しい見知らぬ褐色の髪をした女ラシエルがおり、その存在がアントワーヌに行動への勇氣と自信とを与えて、それに踏み切らせるための蔭の力になったのと非常に酷似した状況をわれわれに見せてくれる。そしてこの『チボー家の人びと』の

ラシエルもまたユダヤ人女性なのである。これについては後述するわけだが、誠に驚嘆に価するのは、ジュリアの場合もラシエルの場合も、それがいま述べたような男への力づけとなり、行動への補佐役となったことについて、作者は一言もそのことへの直接的説明を加えることをせず、ただ控え目にそばに寄りそう美しい女性の姿を描くだけで、見事に効果をあげていることである。つまりジャンがヴォルズムートの病室に入って行ってから、やがてヴォルズムートからドレフユスが無実なことを告げられ、ラザールをせひリユースに会わせて欲しいというヴォルズムートの懇願を聞きいれて、ドレフユス事件の真相を掴もうと初めて決意をかためてその場を去るまでに、問題のジュリアはほとんど姿を見せない。しかるに注意深い読者は、ジャンにこの決意を突然させるに至った原因の一つが、彼の興味をそそった美しいユダヤ娘ジュリアの無言の存在であったことを感じ取らずにはいないのである。このような、重大な転機にある男を励ますものとしての女性の存在が、後述するような『チボー家』のラシエルの手術場における控え目な存在と期せずしてその様相を一にしているのは、誠に興味深いと思われる。

さて、ジャンの仲介によってリユースはラザールと会見し、ジャンもドレフユスの無実についての確信を得るにいたり、自分自身で真剣な調査を始めることになる。そしてここに「種蒔く人」のグループとジャンのドレフユス事件介入が、この小説の中核をなす山場として展開されるわけである。

ついで読者はなんの前触れもなく、「種蒔く人」の新しい事務所で、すでにジャンの恋人となっているジュリアの姿に出くわす。このような、ジュリアとの出遇いから恋人関係への進展の間における黙説法は、誠に巧妙そのものとも言えるし、またこの『ジャン・バロワ』という小説がとっている演劇作法もしくは映画的手法に近い場面転換つき対話体小説という新しい試みの強みであるとも言えよう。すなわち、ジュリアは「種蒔く人」の新事務所の別室から突然姿を現わして、ジャンに電話の取りつきをするという形で登場するが、これだけで叔父ヴォルズムート

の家にひっそりと引っ込んでいたジュリアが、いまはジャンの片腕となって、みずからが属するユダヤ民族に降りかかった一大事件に敢然と立ち向かうと同時に、その運動の推進者と頼むジャンの愛人になっていることが一目して判るのである。しかしマルタン・デュ・ガールは『チボー家』のラシエルの場合と違って、このジュリアとジャンのその後の恋愛についても多くを語らない。「種蒔く人」のグループに対して憤激した反ドレフュス派の暴徒が事務所を襲った時それを急報するジュリア、そして不安そうにジャンにピツタリ寄りそうジュリア：そのような僅かな点描があるだけである。そしてここで作者は次のように極限状況にある人間と、その時に思い設けずに頭をもたげる欲情というテーマ（マルタン・デュ・ガールにみられる死と欲情のテーマの一変形）の片鱗を示してみせる。

Barois tourne un commutateur et aperçoit Julia, tout contre lui, debout, appuyée à une table.

Elle est tellement enlaidie par l'émotion, qu'il la fixe une seconde, pour la reconnaître: les traits crispés, le teint de plomb, le visage vieilli, durci, farouche, avec une expression bestiale et passionnée... L'instinct à nu... Quelque chose de sensuel, d'effroyablement sensuel... Il pense: «Voilà son masque, dans l'amour...» Le regard qu'il lui jette est brutal et pénétrant comme un viol: et elle le reçoit, comme une femelle consentante.

Puis, détente nerveuse: elle s'abat sur un siège en sanglotant.

右に掲げた引用文の個所がふたりの愛についてのほとんど唯一の詳細な描写であり、このほかには、ジュリアを暴徒からかばうジャンの姿が一、二回描かれるだけで、しかもこの闘士たる男女の感情と行動の僅かの隙もない一

致をよく浮かび上がらせている。ただ前に暗示した一種の近親相姦のテーマをここで締めくくることが作者は忘れない。すなわち何も知らぬジャンがヴォルズムートの前でジュリアに速記を頼むとき、ジュリアは叔父の顔に無言の言い訳のような表情をみせる。

Woldsmuth redresse la tête, mais sans la regarder. Elle surprend alors ce sourire affairé, oblique, dans

un visage où tous les traits sont disjointés par la souffrance. Et elle comprend ce que jamais elle n'avait

souçonné...

繰り返して言うが、作者はジャンとジュリアの恋愛については極度に節約した描写でしか言及しない。しかしこのような略説法にもかかわらず、この小説の中核的部分において、ドレフュス事件にジャンが乗り出すこととなり、そしてその若い力のすべてをあげて邁進する理想主義的行動家に変貌するまさにその時期に、ジュリアという女性の控え目ではあるが強力な存在が、ことに彼女がユダヤ人であるということと相俟って、大きな意味を持っていることをわれわれは見逃すわけには行かぬのである。それは殆んど社会全体を向こうにまわして正義のための戦いに乗り出そうとする青年に対する、力強い鼓舞者としての意味である。

しかるにそのジュリアが、幾多の波瀾のちドレフュス事件に一応の落着がついたとき、突如としてジャンを捨て、他の男のもとに走ってしまう。しかもその他の男とは、意外にもジャンらの強力な同僚のひとりゾジェであった。この離反を、ジャンはまったく思いがけぬ時に突然知らされる。それは自分の事務机の上に置かれていたジュリアの唐突でしかも決然とした、あまりにも非情な一通の手紙によってであった。

Tu vas revenir de Rennes, tu vas être étonné de ne pas me trouver au *Semneur*. Je ne veux pas te tromper. Je me suis donnée librement, je me reprends de même. Tant que je t'ai aimé, je t'ai appartenu, sans restriction. Mais, depuis que j'en aime un autre, je te le dis avec franchise, tu ne peux plus exister pour moi. Je te prévient loyalement; c'est ma façon de te prouver jusqu'au bout mon estime. Quand tu liras ce mot, j'aurai repris la libre disposition de moi-même. Tu es assez énergique et trop intelligent pour ne pas comprendre, et pour te diminuer par une souffrance inutile.

Moi, je resterai toujours ton amie,

ジャンは衝撃をうけて、すすり泣きながらベッドの上に倒れる。そこへジュリアの叔父ヴォルズムートが入ってくる。そしてジュリアの裏切りの相手がゾジェであることを教える。ジャンは息がつまるほど驚いて顔色を変える。そしてヴォルズムートもその手紙を読んで身を震わせる。ヴォルズムートは手紙を読み終えると、次のように言う。

《Ah, cette Julia... Je sais... On souffre, on souffre... On voudrait tuer!》

この《殺してやりたくなる》というヴォルズムートの恨みを込めた言葉と、泣きくずれるその姿を見て、ジャンは初めてハッと何かに思いあたる。今までついぞ思ってもみなかったヴォルズムートの姪にたいする苦しい思いをスッキリ理解したのである。そして苦しんでいるのが自分だけでないことを知って、不思議な満足感をおぼえる。彼の口から、

《Mon bon Woldsmuth, comme j'ai dû vous faire du mal . . . 》

という言葉が洩れる。ここでジャンとジュリアの物語は終わって、ジュリアは二度とわれわれの前に姿を見せることはない。

このような、突然に切り捨てるような作中人物の扱いかたは、むしろこの作者の手法としては珍しいものであり、確かに異様な感を与える。息の長いこの作家の小説作法においては、作中人物たちは因果関係の糸に結ばれて、幾度となく筋の運びの上に姿を見せるのが常である。ただふたりのユダヤ女性だけは一度姿を消すや、その放浪の旅から二度と戻ってくることはない。しかし、じつはこのことに大きな意義がひそめられているのである。その意義の一つは、前述したように、ジュリアがジャンのドレフュス事件介入に勇気を与えた、というよりは、密かな糸をもって叔父と力を合せてジャンをドレフュス事件に引きずり込むことになった、その役割の重要性を強調しようとする作者の意図がここに覗えることである。すなわち、ジュリアはドレフュス事件が結末に近づき、運動に終結がもたらされたとき、その役割を終えて姿を消さねばならない。言い換えるならば、姿を消すことによって、彼女の演じた役割を明確にする必要があったのである。ユダヤ人として同胞の正義を擁護するために、有力な闘士をジャンのなかに見出した彼女は、進んでジャンに身を投げ出すことによってその力を借りたのち、使命を終えたと知るや、密かに蔭で彼女の糸をひいていたゾジエのもとに走った、と解釈しなければならぬ。観点を変えて言うならば、ユダヤ女性ジュリアはフランス人ジャンのもとに永く留まることは許されず、いつかは放浪の旅に出なければならぬのである。このことを裏うちするのが『チボー家』のラシエルのこれと酷似した去り方である。ジュリアはラシエルの素描にほかならない。

ところで、ジュリアの恋人としてかなりの期間潜伏していたこのゾジエという不気味な男が、じつはこの稿で取り扱う問題に重要な位置を占めるのであって、われわれはこの男を『チボー家の人びと』のラシエルの情夫イルシユと比較せねばならないのだが、これについてはもう少し先で触れることにする。

さて突如としてジュリアを舞台から掻き消すように追放したマルタン・デュ・ガールの手法の意義について考えさせられる第二の点は、ジュリアというユダヤ女性の人物像の特徴についてである。これについては、すでに原文から幾つか引用して示した通りであり、再び繰り返すことを避けるが、最初からむしろ大胆不敵とさえ見える挙動を僅かな筆致でもって描き出されていたジュリアは、その突然の離反と、大詰めの冷酷な手紙の文面とによって、その性格を強烈に印象づける。そしてこの性格がまた『チボー家の人びと』のラシエルというユダヤ女性の人物像との比較という点で、われわれに重要な問題を残すわけである。

ともかくここで、一応ジャンという主役人物たる青年とその一時の恋人となったジュリアというユダヤ女性、そしてそのジュリアを密かに操っていたゾジエという複雑怪奇な蔭の情夫からなる一種の三角関係的構図、そしてヴオルズムートの近親相姦的な愛、を頭に入れておく必要がある。その上でさらにわれわれは、『チボー家の人びと』のアントワーヌとラシエルの愛について一瞥する時が来たのである。

『チボー家の人びと』のラシエルの場合

アントワーヌとラシエルとの出遇いの場面を仔細に観察すると、そこにジャンとジュリアの出遇いに用いたのと酷似した手法が隠されているのが判る。これは前に触れた通りである。そしてその手法が決して偶然のものでなく、

緻密に計算された意図的なものであることが、本稿におけるような両者対比の見方によって明瞭になると思われる。その計算された手法というのは、やがて恋人となる運命にある女性を何か別の出来事に対する脇の存在として、控え目にそして小出しにするという暗示的な登場のさせ方であるのだが、このような手法が、本稿の初めにおいて述べたような、主人公を或る行動へと鼓舞するために現れる女性について用いられ、しかも、両者ともがユダヤ人女性であるところに、何かしら一脈相通ずる意図的なものを作者のうちに見出さずにはおれなくなるのである。そして、主人公を鼓舞する女性としてユダヤ女性が選ばれていることが偶然でないという考え方が、あながち筆者の主観的な判断とは言えないということを実証するために、筆者は余談になるが以上二つの例に加えて、作者の処女作品たる中篇小説『生成』における例を、これに付け加えることが出来る。これについても後で詳述するつもりであるが、『生成』の主人公アンドレが小説を書けずに悩み続けたのち、フォンテヌブローのホテルに泊り、そこでケティ・ヴァリーヌという女性に出会い、俄かに創作意欲を燃え立たせて仕事と恋を両立させて息を吹き返すというエピソードがある。そしてこの女性がフランス人でなく、ロシア女性という異国女になっていることを筆者は言いたいわけである。ロシア人であってユダヤ人ではないのだが、これがフランス人女性ではなく、革命前の亡命ロシア人というところに問題があると思われる。この点については、またあとで再考したい。

さてアントワーヌとラシエルの出遇いは次の如きものである。アントワーヌは交通事故にあつた少女デットの枕元に偶然に駆けつける破目になる。そこにはすでにひとりの若い医者が呼ばれていたが、この医者は少女の容態の重大さに怖れをなして、為すすべを知らない。そこへ駆けつけたアントワーヌの眼に、まず、最初に入ったのが、知らぬ褐色の髪をした女だった。ちやうど前述したように、ヴォルズムートに会いに行ったジャンを迎えたのが、まず見知らぬジュリアだったのとよく似た状況である。

アントワーヌは少女に一刻の猶予もなく外科手術が必要なことを見て取る。しかしアントワーヌはまだ駆け出しの内科医に過ぎない。ここで非常な冒険を犯さねばならない。その決意を支えるものは、その場に居合せたもうひとりの臆病な若い医者にたいする優越感であり、チポ一家一流の負けじ魂だった。表面的にはそのように描き出されている。言い換えるならば、アントワーヌが手術を決意して一世一代の大冒険を試みるあいだ、褐色の髪の毛の女はその助手として、控え目にそして忠実に、敏捷な動作でアントワーヌに舌を巻かせたり喜ばせたりしながら、ソツと蔭に潜んでいるのにすぎない。しかし注意深く読む者には、もうひとりの医者にたいする優越感と自己顕示欲が、そこに居あわせた美しい女の存在に大きく影響されていることを見逃すわけには行かない。すなわちここにも、ジャンとジュリアの時に見せたような一種の黙説法が巧みに用いられているのであり、筆者はこれを周到に計算された手法と言ったわけである。

... ivresse joyeuse de l'acte; confiance sans limite; activité vitale tendue à son paroxysme, et, par-dessus tout, exaltation de se sentir superbement grandi.

薄氷を踏むような死と生のあいだを行き来する危険な手術に没頭しているあいだ、いつもアントワーヌの意識のなかに、ラシエルの豊満な肉体から発散するものが憑きまとう。

「この美しい女は、一体どういう女なのだろう。一体ここで何をしているんだろう。」というかすかな疑問がいつも意識を去らない。

手術は終わった。そして奇跡的に成功した。アントワーヌはその場で患者を見守りながら次第に知覚を失い、グ

ツタリして居眠ってしまふ。そして次にあの有名な場面が描き出される。すなわちアントワーヌのかたわらに坐つて患者に付き添っていたラシエルも居眠りを始め、次第にアントワーヌにもたれかかつて、アントワーヌが眼を覚した時にはピッタリと寄り添って眠っていた、という場面である。ふたりの接触がアントワーヌに快い温もりを与え、それが彼を眠りから引き出したのだ。この場面についてカミュがいみじくも解説しているように、ふたりは恋人となる前から、すでに肉体で愛を交わしていたのである。このようにアントワーヌとラシエルの愛はジャックとジュニーのそれとは異つて、初めから肉体の喜びを伴つた霊内一致の喜びであつた。

Rachel se contemplait dans un fragment de miroir fixé au mur par trois clous et riait. Avec son casque de cheveux roux, son col dégrafé, ses robustes bras nus, son regard libre, hardi, un rien moqueur, elle évoquait une figure de l'émeute républicaine: la Marseillaise sur des barricades.

このいささかも悪びれずに、大胆な眼差しをした、たくましい腕を持つ女性ラシエルは、あのジュリア・ヴォルズムートの生まれ変わりとしか思えない。そればかりではない。マルタン・デュ・ガールはこのラシエルにも、ジュリアについて前述した時にとくに注目した、あの女らしい慎みをかなぐり捨てたような、あられもない仕草をなおいつそう大胆にさせることを忘れない。ジュリアの時の

ドアの入口は狭い。だが彼女はまるでそれを気にしていないようだ。女らしくからだを引つこめようともしない。それどころか、顔を近ぢかと突き出すようにするので、その息が彼の頬に吹きかかるほどだ。

を思い出そう。ラシエルはこのジュリアの大胆な動作に輪をかけたような振舞いを見せる。すなわち、アントワーヌが家に帰ろうとして、階下のラシエルの部屋の前まで来て彼女に「さようなら」と言い、握手を求めて手を出す、ラシエルは微笑を浮べたまま手を出そうともしない。アントワーヌが重ねて握手を求めると、とたんに彼女は次のような振舞いに出るのである。

Il vit le sourire de la jeune femme se figer et son regard durcir. A son tour, elle tendit la main. Mais elle ne lui laissa pas le temps de la serrer: elle avait saisi Antoine avec force et l'avait attiré d'un geste brusque dans le vestibule, repoussant le battant derrière lui. Ils se trouvèrent debout, l'un devant l'autre. Elle ne souriait plus, et cependant elle n'avait pas rapproché les lèvres: il vit luire ses dents. L'odeur des cheveux l'enveloppait. Il pensa au sein nu, à la jambe brûlante. Il approcha durement son visage, et plongea son regard dans les yeux de Rachel, élargis tout près des siens. Elle ne recula pas; à peine s'il sentit ployer la taille qu'il avait entourée de son bras: et ce fut elle qui jeta sa bouche sous les lèvres d'Antoine. Puis elle se dégagea avec effort, baissa la tête, et, souriant de nouveau, murmura:

— *Des nuits comme ça énervent . . .* *»*

握手のために出した男の手を引っぱり込んで、男を部屋の中に入れ、ピタリとドアを閉じて男に激しい接吻をかけてくる女、これは作者がジュリアについて惜しんだ筆を取り戻しての描写であろう。また実際に、前述した通り、アントワーヌが大手術を行なうという重大な瀬戸際に立たされていた時には、ラシエルの存在はあのジャンに

たいするジュリアの存在と同じく、暗示的な言い落としと抑制された描写によってしか示されていないなかったのだが、これから以後作者は、思う存分にラシエルの肉づけに身を任そうとする。ジュリアにおいて素描をうけたユダヤ女性が、ラシエルにおいて十分に陰影と色彩を施され、厚みと豊かさのマチエールを帯びるにいたるのである。

ラシエルと別れたアントワーヌはまたすぐに戻ってくる。そしてラシエルを食事に誘う。家を出ようとするとき、次のような会話が交わされる。

— 《Préférez-vous sortir seule, et que je vous rejoigne dans la rue ?》

Elle se tourna en riant :

— 《Moi ? Je suis complètement libre, et ne me cache jamais de rien !》

この会話は記憶にとどめておく必要がある。作者が恋人同志にこの種の会話をやらせるのは、これが初めてではなく、実はあの『生成』にこれと殆んど同じ場面があり、この点について、とくに後述することになるからである。食事をしながらアントワーヌはラシエルの名前を初めて知り、その名前からラシエルがユダヤ人であることを見抜く。

Goeffert . . . A l'idée qu'elle était peut-être israélite, le peu qui subsistait chez Antoine de son éducation s'émut: juste assez pour assaisonner l'aventure d'un piment d'indépendance et d'exotisme.

ラシエルは母だけがユダヤ人という半ユダヤである。食事のあいだじゅうラシエルは「私はまったく自由ですの」と幾度も繰り返す、それは他人の自由になりうるという意味ではなく、誰にも束縛されたくないという意味であり、そこから、自分はしおらしい友だちや気の許せる恋人になる資格がないのだ、と宣言する。

しかしアントワーヌが、あの手術をうけた少女を見に行くという口実を作って、というよりラシエルにそれを誘われて、彼女の部屋の前まで来ると、ラシエルはアントワーヌを部屋に引き入れ、ドアに鍵をかけて、その欲情を憚るところなく男の前にさらけ出して、一挙に身を委ねてしまう。

ラシエルの父親はオペラ座の意匠師をしていたフランス人だが、母親はユダヤ人で、盗癖があり、精神病院で死んでしまった。ラシエルには兄がいて母親の性質を受け継いだのか、恐しい銀行事件を起こしたりしたのち、クララという女と結婚するが、事もあるうに新婚旅行の行先で、新妻のクララを殺して自殺してしまった。じつはこのクララもユダヤ人であり、その父のイルシュという奇怪な男が、じつはラシエルを遠くから操る蔭の恐しい存在となっているのである。クララとイルシュをユダヤ人と言ったが、作者は明瞭にそう述べているわけではない。しかしラシエルがアントワーヌに自分を遠くから惹きつけている五十がらみの男がいることを話したとき、その写真を見せながら大きな鉤鼻に注目させることによって、それがユダヤ人であることを暗示している。ラシエルの兄が、新婚早々に新妻を殺して自殺するのには、そこに宿命的なものがまつわりついている。それはクララの父イルシュがわが娘にたいしての近親相姦的な愛を断ち切れず、娘に鞭で打たれてもなおまつわりつき、娘はその忌むべき関係から逃れ出たい一心で、ラシエルの兄と結婚するのだが、その新婚旅行の行先まで父イルシュはついて来て、その醜い場面を夫が見つけることになり、ついに惨劇となったのだ。

以上述べただけで、あの『ジャン・バロワ』のジュリアのエピソードとの類似のパターンがここに見出される。

すなわち、近親相姦というテーマ、そして何よりも『ジャン・バロワ』で見たあのジャン——ジュリア——ゾジェ（奇怪な蔭の情夫）というあの構図と軌を一にするアントワーヌ——ラシエル——イルシュという三角図的構成である。

因みにここで『ジャン・バロワ』について述べた際に触れた『生成』の場合についても考えて見よう。ここにもまったく同形の図式が発見される。すなわちアンドレ——ケティ・ヴァリーヌ——姿なきロシア人劇作家、という三角図である。女に経済的援助を与えていたこの劇作家は、ちょうどラシエルに対するイルシュと同じく、小説の中に一度も姿を見せないが、遠くから女を強く牽引し、結局女はその劇作家の許に帰ってゆくほかはない。この三つの小説における類似した三角図的構成を今一度ここで強調し、のちの論旨展開に備えておきたい。

さて、それはともあれ、アントワーヌはラシエルを識ったことで、自分が急速に変化して行くのを感じる。それまでの人生のあらゆることが闇のなかに沈んでゆき、すべて過去のものとなってゆく心地がする。このアントワーヌのラシエル体験は『チボー家の人びと』の中心人物たるアントワーヌの生成に甚大な影響を及ぼす。この点についても、カミュの論述以上に明晰な判断を下したものはいない。カミュは次のように言う。

アントワーヌの首をちぢめていた殻を破ったのは女だった。真理は肉体によってしか肉体的人間に達することができない。アントワーヌの辿る道が見できないのはこのためである。この際、その道とはラシエルという名の道であり、彼女とアントワーヌの結合は『チボー家の人びと』でも最も美しい挿話の一つとなっている。アントワーヌとラシエルの愛は、文学に描かれる多くの愛とは反対に、心情吐露という恍惚たる天空を飛翔したりしない。しかしその代り、あのような真実が可能となる世界を知らされたひそかな悦びと感謝の念で読者をみたま。ラシエルの肉体的輝きは『チボー家の人びと』全体を照らし、アントワーヌは死の前日までその温もりで心をあたため続ける。彼はラシエルの中に金で買った、恥かしめられた餌食ではなく、心の寛い対等者を見出したのだった。

おそらく彼女はアントワーヌを讚美しているであろうが、彼に従属したりはしない。体験も豊かで世間ずれもしており、彼にたいして秘密を蔵し、自分のありのままの状態を捨てることはできない。アントワーヌを愛しつつづけていながら「私はこんな女なの」と言う。そして彼は自分のほかにも男がいるらしいことを認めるほかなく、そうしたあたりかたがえって楽しく魅力的だと思わざるをえない。ふたりの出会いがそもそもふたりを対等に置いたのだった……アントワーヌは喜んで感謝のうちに上座を降りた。ジャックが別離の長い年月のち、ローザンヌで兄に再会したとき、兄が《変わった》ことに気がついた。百の説教がなしえぬことを、ひとりの女がやってのけたのである……しかし彼女はアントワーヌが大きく成長するのを助け、よりよく死ぬことをさえ助けたことになる。死が近づいたとき、アントワーヌがふり返るのはやはり彼女のほうだからである……でいまやアントワーヌは他人の存在を認識し、たとえば恋においても己れだけが享受するものではないことを識っている……(註2)

この点、イギリスの研究者 Robert Gibson がその Roger Martin du Gard という著者のなかで

... to Barois and the Thibault brothers it (love) can never be more than a brief diversion.

と言っているのは、皮相的で浅薄な見解に過ぎない。真剣に読んでいのかどうかさえ疑いたくなるほどである。これに反して、アメリカの優れたマルタン・デュ・ガール研究家 David L. Schalk の次の言葉はジャン・バロワについて言ったものだが、さすがに正鵠をえており、アントワーヌにも当てはまると同時に、本稿の論旨の一部を論証してくれるものである。

Martin du Gard points out more dearly what he has hinted at before — that a complete man must have the support and companionship of a woman, if he is to complete effectively in the outside world.

アントワーヌはラシエルによって初めて真の人生に触れる。ちょうどジャンがジュリアによって初めてみずから力を知るように。ただ『生成』のアンドレだけは、ケティ・ヴァリーヌという貴重な恋人に巡り会いながらも、それからさえ逃避するという卑怯な男、したがってジャンやアントワーヌが為したようには、その体験から何もをも引き出し得なかった無力な男として終わった。そしてこのことが、人生落伍小説『生成』においての痛烈な皮肉となって、その意義を深くするのである。そして『生成』ジャン・バロワ『チボー家の人びと』と漸進的にこれを眺めるとき、これら異国女の恋人が主人公に及ぼす影響の度合と意義もまた、段階的に深いものとなって現れてくる。

さて、アントワーヌとラシエルの恋とジャンとジュリアの恋との類似は、これだけには止まらない。恋の結末において、それは驚くほどの一致を見せる。すなわち恋のさなかにジュリアがジャンを俄に捨て去ってゾジェに走り、ジャンを悲歎のどん底に放置して、風のように去って行ったのと同じく、ラシエルは涙ですっかり面変わりした顔をあげ、絶望的な眼つきでジツと男を見つめて、自分が去らねばならぬことをアントワーヌに知らせる。あの怖い男イルシュ、ラシエルに言わせると人間ではないというあの怖いイルシュが、ついに遠いカサブランカから女に來いと呼びかけて來たのである。ラシエルは行かねばならない。彼女は、アントワーヌのような満ち足りてフランスに根をはやしている男のもとに止まることを許されぬ、放浪の女だったのだ。ラシエルは去って行く。筆者が冒頭で「さ、ま、よ、え、る、ユ、ダ、ヤ、人、が、性、を、変、え、て、現、れ、た、か、と、思、え、る」と言ったのは、この出現と消失の神秘のことである。

アントワーヌはあのジュリアンに捨てられたジャンのように、すべてを失ったという絶望のうちに自殺を思う。さて以上をもって、作品そのものに則した解説と若干の分析を終わることとしたい。要は以上のようなユダヤ女性テーマが、そしてそのエピソードが見せる特異なパターンが、作品にとって、もしくは作者自身にとって、何を

意味するのかもしれないことである。これについての考察を次に行ないたいと思う。

まず当然のことながら第一に問題となるのは、とくにユダヤ女性を作品に登場させるということの意義、についてである。『ジャン・バロワ』におけるジュリアの場合には、それがドレフュス事件という一種のユダヤ人問題と密接に結びついているがゆえに、その意義を了解することは一見困難なことではない。筆者は本稿でそのような考え方に止めることは出来ないのだが、一面これは図式的に納得できることでもある。しかし『チボー家の人びと』におけるラシエルがユダヤ人でなければならぬという理由は、そのように簡単には済まされない。すなわちラシエルは、たとえば『生成』におけるケティ・ヴァリーヌのようなロシア女であっても、あるいは他の異国の女であっても、また放浪性を持つならばフランスの女であってもよいように見える。しかし、マルタン・デュ・ガールは強いてこれをユダヤ女性としている。その意義を筆者は次のように解釈する。すなわち、ブルジョワの家に生まれ、みずからに充足し、人生への自信に満ち溢れたアントワーヌ、この主人公に開眼を迫る者は、その正反対の存在、すなわち、その生まれ、その環境、その民族性からして、体制からはみ出したもの、締め出されたもの、そして根なし草たる宿命を負わされた民族に属する、放浪の、自由にして奔放な恋人でなければならぬ。カトリックを精神的支柱として形成されたフランス資本主義社会、その抜くべからざる因襲的ブルジョワ社会の崩壊を描かんとするこの小説において、またそのような社会からの脱出を計ったジャックが結局無駄な死を遂げるほかなかったような牢固たる機構社会の中で、その化身とも言うべき青年だった主人公アントワーヌを、この小説のエピローグにおいて完全に覚醒させるための重要な要素として設定された恋愛体験においては（たとえ「父の死」以後において『チボー家』の計画大変更と言う事実があったとしてもである）、ただ他国の女、あるいは放浪性ある単なるフランスの女をもってするだけで事足りるものではない。ここに作者がユダヤ女ラシエルを登場させた理由がある。

そして右のような仮説は、本稿で盛んに引き合いに出している『生成』におけるケティ・ヴァリーヌというロシヤ女を加えることによって、むしろよりよく認容されるものとなる。ケティは《正義：理想：同胞：新しい人生：次の時代：》といった言葉がすぐ口にのぼる女、つまり革命を夢みる女である。ソヴィエト革命以前の虐げられた階級に属する女であり、祖国を捨てて放浪する女でもある。優柔不断な温もりの中に安住するアンドレは、とてもこの女にはついて行けない。愛においても「奪う」女であるケティは、アンドレを鼓舞し覚醒させることもできたはずなのだが、アンドレの無能さはそれを不発に終わらせてしまった。

この点についてわれわれが気づくのは次のことである。それは『生成』『ジャン・バロワ』『チボー家の人びと』という三つの作品において、そこに登場する他の多くの女性たちが示す特徴である。すなわちこれら三つの作品で、本稿で問題としているケティ・ヴァリーヌ、ジュリア、ラシエルを除くほかの女性作中人物は、唯ひとりの例外（『チボー家』のジェニー）を除いて、すべて伝統の枠の中に生き、因襲に捕えられ、身動きの出来ぬ古い社会の中で、小さな幸福を求めてお・お・おと生きる、生気に乏しい存在でしかない。この点について筆者はかつて、『生成』を評したとき、「あの婚期を前にして、ただあせりと無為のうちに、むなしく何かを待っているだけのおびただしい適齢期の娘たち：このような青年子女の姿を、一つの層として、こんなにもごとく示した小説はそう多くはないだろう^(註3)」と書いたが、『ジャン・バロワ』にしても『チボー家』にしても同じような様相が看取できる。これらの姑息なフランス女性たちに対抗するごとく、三人の異国女は自由奔放、大胆不敵であり、風通しがよい。そのことをよく示すものとして、前に軽く触れて記憶にとどめようと言った、ささやかな一つの情景をもう一度採りあげてみよう。

その場面とは次のようなものだった。すなわち、すでに原文で引用した個処だが、アントワーヌがラシエルと識

り合ったところ、ふたりで食事に出かけようとしてアントワーヌがラシエルに「人眼につくといけないから、別々に家を出て、何処かで落ちあおうか」と言うと、ラシエルは「私は自由な人間で、何一つ隠しだてすることはないと一笑に付してしまふ場面があった。これと全く酷似する場面が『生成』にも見られると前触れしておいたのだが、それをいま示すと次の通りである。ラシエルとアントワーヌの場合は、今から出かけるという時の恋人同志の会話だが、今度は恋人が散歩から帰って、一緒にホテルへ帰る場面である。

オベリスクの四つ角までくると、アンドレは遠慮して別々に帰るべきだと言い、小さな声で言った。

「いっしょに帰らぬほうがよいでしょう。」

彼女はびっくりして相手を見た。しばらくは理解できなかった。この散歩で何か悪いことをしていたように暗示されたことは、無作法もはなはだしいと思ったのだ。深く傷ついて、すげなくこたえる。

「なぜなの？」

彼も相手がひどく傷ついたことをさとった。そして不愉快になった。で、わざとむっつりしてホテルの門までついて行った。

「フランス人って、ほんとうにおかしいわ！」

彼女は手をさしのべながらさりげなく言(註4)った。

以上二つの場面を、偶然の一致による類似として済まされるものであろうか。「主人公対外国女性」で表わされる「老いたるフランス対自由な異国女」というテーマが「フランス人って、ほんとうにおかしいわ」という言葉に要約されているのである。

このようなフランス社会の状況をこそマルタン・デュ・ガールは生涯をかけて描き続けたと言える。すなわち、

『生成』においてはそのような社会を舞台として用い、『ジャン・パロワ』においてはそこから脱出する青年の努力を問題とし、『チボー家の人びと』においては大戦によるその崩壊を描くのである。そして『チボー家の人びと』制作中に書かれたもう一つの傑作中編小説『老いたるフランス』は、その標題が直接的に暗示するように、沈滞した因襲的フランス社会を僻地の農村に閉じ込めて、完膚なきまでにその墮落振りを抉り出すための作品である。

ところで、新しくとり挙げたこの『老いたるフランス』において、本稿で問題とする異国人の作中人物が見出せないかどうか。驚いたことに、このような草深い寒村の中にまで、恐らくこれこそは無意識的であろうが、やはり作者はひとりの外国人を登場させているのである。ただし、この作品においては一種の性転換によって、その異国人はドイツ・ベームン出身の払い下げ戦争捕虜の青年となっている。そして面白いことにここでも、この異国の青年が、この作品のなかで唯一の生氣ある人物たる女丈夫的な女性の沼地開墾事業を助け、これを鼓舞する、役割を担わされているのである。更に興味深いことに、ここにもあの三角関係が忘れずに仕組まれており、その精力にみちた女と、風通しのよい異国青年と、戦争から帰って来た女の夫、とが奇妙な同棲生活を営む。そしてこの三人のうちで無気力な卑怯者は、そのような屈辱的生活に甘んずるフランス人の夫にほかならない。その精神においてなんとという思いがけない類似が仕組まれていることか。(なお他に年老いたベルギー人夫婦も出てくる。)

以上、細部をもってする分析によって、ユダヤ人もしくは外国人の作中人物が、マルタン・デュ・ガールの作品のなかで、独特にして重大なテーマを構成していることが明白になったと思う。

次に、更にこのテーマについて推論すべく残された問題の一つは、以上挙げたいずれの場合にも見られた一種の三角図的人間関係の構成についてである。これについて、*Portrait de la Juive dans la littérature française* (Nizet 1970)の著者 Luce A. Klein の珍重すべき研究を援用すると、次のような経緯が明らかとなる。

Klein の著作は、

- I La Juive, l'Orientale et l'Eternel Féminin (ユダヤ女、東方の女、そして永遠の女性。)
- II La Compagne du Juif errant (さまよえるユダヤ人の妻。)
- III Le Juif et sa Fille. La Juive et son Père (ユダヤ人とその娘。ユダヤ女とその父。)
- IV La Courtisane. La demi-mondaine et la mondaine (娼婦。高等娼婦と社交界の女。)

という四章に分けられているのであるが、第一章では、社会的に目立つ存在でありそれゆえに排斥を強く受けて来たユダヤ人男性に比して、人眼につかぬ存在として過ごしてきたユダヤ女性は、むしろ美の理想、永遠の女性としてのイメージを賦与される傾向があることから説き進む^(註5)。そしてその伝統的典型の一つとして旧訳聖書の女性エステルと並んでラケル^(註7)(ラシエルのヘブライ名)がいるという指摘はこの際ひじょうに興味をそそられる。

次に第二章以下で「さまよえるユダヤ人」について考証を進めるにつれて、著者は期せずして一種の三角関係の誕生に説き及ぶのである。そしてその三角図の原型がファウスト——マルガレーテ——メフィストフェレスという関係の影響下に生じてくるという、興味津津たる理論を展開する。

さまよえるユダヤ人というものは人も知るごとく呪われた存在であり、孤独のなかに放浪を続けることを余儀なくされているものである以上、恋人も妻も持つことができないのが宿命なはずである。ところが Klein によると、十八世紀にいたって、これに「さまよえるユダヤ人の恋人」という配偶者が登場すると言う。これを初めて登場させたのは、ドイツの Frau Krüger という名の女流作家のものと思われる殆んど知られていない作品によるものだが、^{うで、} Klein はこれが女流作家の手に成っていることと、女性の社会的地位が問題になりはじめた時期の作品であ

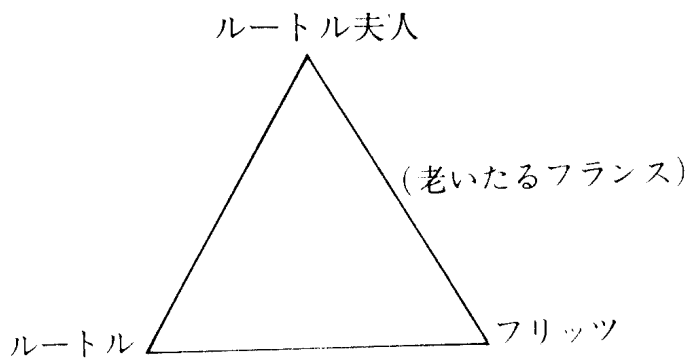
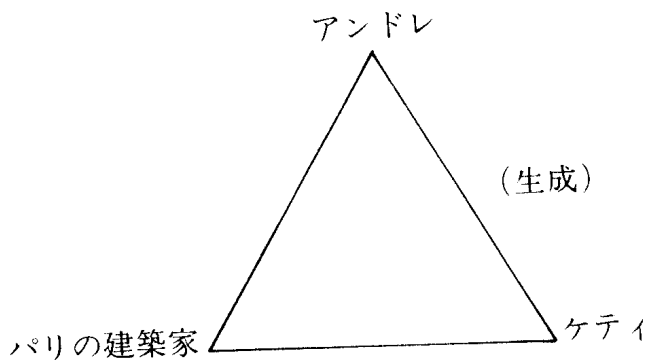
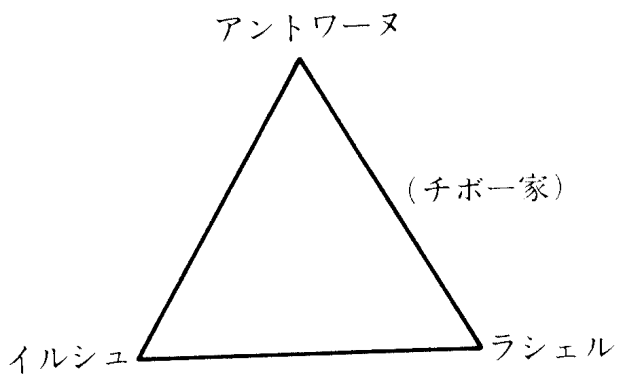
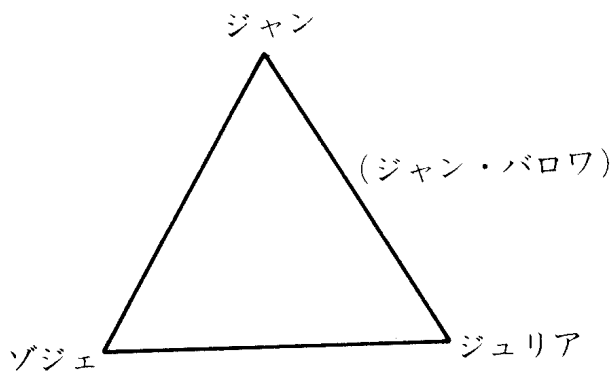
るところに、その意義が見出せると言っている。

次に、明瞭にさまよえるユダヤ人の妻が登場するのは、フランス人の歴史家であり作家であるエドガール・キネー (Edgar Quinet) の *Ahasvérus* (一八三三) という膨大な作品においてである。四幕から成りプロローグとエピソードのついた散文詩による寓意劇で、最後の審判までを含む人類の歴史全体を包含するような一大構想の作品である。ここでさまよえるユダヤ人は人類全体の種々相を肉化し、とくに物質主義と疑惑と苦悩を体現するが、この主人公にラシエルというユダヤ女性が組み合わされるのである。ラシエルは天上の人物であるが、呪われた不幸な人間への憐憫と愛にほだされ、このため天国から追放されて、地上において理想的愛の象徴、希望と慰めの象徴となる。そしてモブ(死の象徴)の迫害にもかかわらず(ここに一つの三角図が構成される)、ドイツのヴォルムスの古い町でさまよえるユダヤ人アハスヴェールスと結ばれ、彼とともに人類を代表するのだが、とくに注目を要するのは、このラシエルが男を補佐し、母性的愛で主人公を鼓舞する女性としての役割を持つことである。この点もすでに述べてきたユダヤ女性たちのイメージに通じるものがある。Kleinはこのラシエルの天上と地上とにまたがる苦悩というテーマが、さまよえるユダヤ人というテーマとファウスト・テーマとの近づきによって説明されると言う。

この二つのテーマの結合はすでに中世文学において、十三世紀末の *Rutebeuf* (一二八五年ごろ歿) の *Miracle de Théophile* にも見られ、そこでは呪われた魔法使いの中世的ユダヤ人のイメージが彼を支配する悪魔のイメージに結びつけられており、ここにすでにさまよえるユダヤ人・テーマとファウスト・テーマの結合があるのだが、ここでは三角形の一つの頂点たる女性のイメージははまだ現れていない。このさまよえるユダヤ人十悪魔という結合テーマにもう一つの頂点を加えられて女性が登場し三角図の完成を見るのは、ファウスト伝説の進展に負うとこ

ろが多い、と Klein は指摘する。そして、その進展において最も完成された形がゲーテのファウスト、メフィストフェレス、マルガレーテが構成する三角図であることは言うまでもなく、これがキネーのアハスヴェールス——モブ——ラシエルという構図に靈感を与えたのだらうと推測する。だが、このような三角図はこのほかにも、そしてそれ以前にも見出されるのであり、例えばラシーヌの『エステル』のなかにもそれがある。近代作家のものとなると、バルザックの『浮かれ女盛衰記』のなかのエステル——ヴォートラン——リュシアンという三角図などが見られることを指摘した Klein は『チボー家の人びと』のラシエル——アントワーヌ——イルシュの関係にまで触れている。因みに、マルタン・デュ・ガールにおけるユダヤ女性について特に着目しているのは、多くの研究書の中でも Klein のこの書において他にない。ただし Klein もそれを数行で暗示するに止めている。Klein はこの書でラシエルという名を持つ女性作中人物を重要視するが、その近代的代表として『チボー家』のラシエルのほかに、プルーストの『失われし時を求めて』におけるユダヤ人の女優ラシエルを挙げている。そしてこれらユダヤの女性はずねに精神的で純粋な面と、一方では娼婦的で放浪的な面が憑きまとうと言う。さらに進んで第三章では、「さまよえるユダヤ人とその恋人」というテーマから、やがて「さまよえるユダヤ人とその娘」というテーマが生まれ、それが例えば Merville と Mailan の幻想劇 *Le Juif errant* (一八三四)・Paul Féval の *La Fille du Juif errant* (一八七八)・Alexandre Dumas fils の *La Femme de Claude* (一八七三)などになると言つ。

さて Klein の説の要は右の如きものであるが、マルタン・デュ・ガールの頭のなかにこのような伝承的構図があったかどうか、それは私のいまだ明確にしようところではない。いま接し得る文献(膨大な書翰集を含めて)のどこにも、そのような言及は見られない。また一見して判るように、ジャンにしろアントワーヌにしろ、いずれもこれら中心人物はさまよえるユダヤ人ではなく、むしろフランス人らしいフランス人として提出されていること

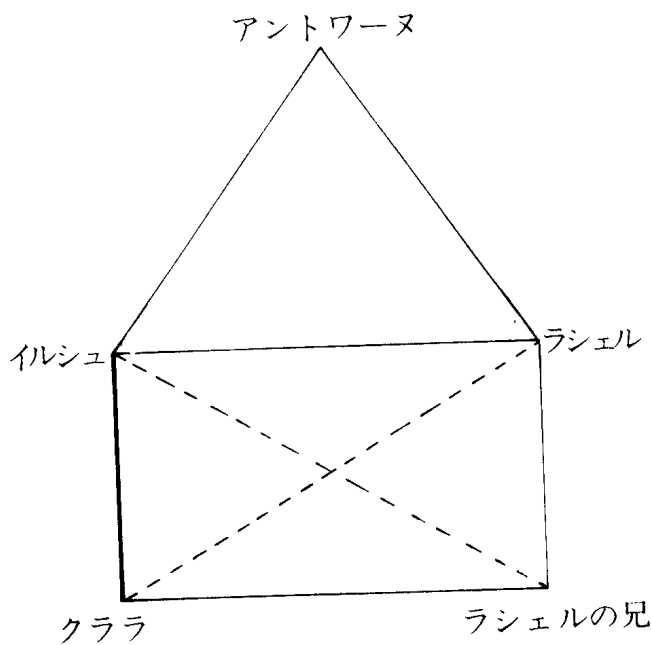
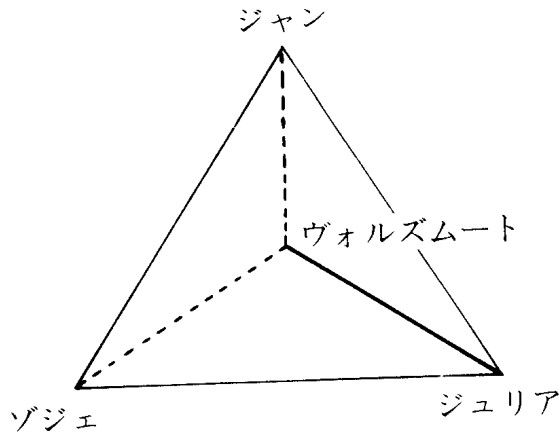


は言を俟たない。であるから、ゾジェのように蔭に潜んで、或いはイルシュや『生成』のロシア人建築家のように遠隔操作で、女を惹きつけ操る無気味な存在としての男たちはまさにモブ的人物であっても、中心人物たることでアハスヴェールスにあたるジャンやアントワヌがさまよえるユダヤ人でない以上、三角図はモブ——アハスヴェールス——ラシエルという関係と同じものとはならない。因みに、マルタン・デュ・ガールの諸作品から筆者が抽出した三角図を整理してみると、次のようになる。

さて右のうち、いま主として問題とするのは上の二図であるが、頂点にあるジャン、アントワーヌはユダヤ人ではなく、さまよえるユダヤ人はむしろ底辺左のゾジェとイルシュなのであって、彼らの配偶者であるユダヤ女ジュリアとラシエルは、所詮一時の恋人であるジャンとアントワーヌを捨てて、彼女らのアハスヴェールスのあとを追わねばならぬ宿命にある。すなわち強いて言うならば、さまよえるユダヤ人を主人公とせず、蔭の人物とするマルタン・デュ・ガールの作品においては、むしろそれは「さまよえるユダヤ女・テーマ」なのであり、その三角図は伝承的なその応用型であり、転回型であると言ってよからう。

次に残された問題は、右の三角図的構成にいつも憑きまどっていたあの近親相姦テーマについてである。このテーマはこの作者においては、一見本稿の主題とは別個に理解すべきもののように思われるかも知れない。なぜならば、それはこの作家において繰り返し出現する幾つかの主要なテーマの一つであって、ユダヤ女性テーマに付随するものとは限らず、それとは別の場面においても重要な役割を果たしているからである。例えばこのテーマの典型的な現れは『アフリカの告白』であるが、この作品はもっぱら純粹に近親相姦のみを取り扱ったものである。ただ筆者はこの作品についても、或る奇妙な特徴を見逃すわけには行かない。それはこの作品の奇異な標題がすでに示している異国趣味、ということである。なぜこの作品の近親相姦の姉弟はイタリア人でなければならないのか。そしてその舞台がなぜアフリカでなければならないのか。この物語は明らかにフィクションである。しかるに、ジイドとの往復書簡のなかで作者自身さえ奇異なものと認めているこの作品の不可解な標題と物語の人物と場所の設定の仕方は、この作家におけるこのテーマと異国趣味との隠密なつながりを暗示するものではなからうか。^(註8)そしてフランス人を主人公とするこのテーマは『無口な男 *le Taciturne*』(一九三二初演)に仮の姿を垣間見させるが、結局それは間違いであったことが判るといふ筋になって否定されてしまう。そして『老いたるフランス』にもこのテ

ーマの暗示がある。この小説は精神医学や精神分析学を喜ばせそうな要素ばかりで出来ていると言ってもよいような作品なのだが、面白いことに、女房の眼の前で娘を犯す酔っぱらいの父親のことを、女房は「あいつはお前の父ちゃんなんかじゃないんだよ」と娘に教えて否定する。そうしていっぽう、老いぼれた父親を監禁して奇怪な生活を続けている兄妹が、悪徳にみちたモーペイルー村の人びとにとってさえ胡散臭い存在であり、しかも村から孤立して遠くにある一軒家で村八分にされたような得体の知れぬ暮しをしており、兄はトンキン人という異国ふうの渾名の持ち主である点が注目される。このテーマの特質上、これを特殊な人間たちに属するものとする配慮は当然かも知れないが、そのいずれの場合においても、多少の差こそあれ異国趣味のにおいを感じられることは事実なのである。しかしここでは、一応それを本稿の主題たるユダヤ女性テーマにまつわるものに限ってみよう。それらを図示すると次のようになる。



この図で見る通り、『チボー家』の場合は『ジャン・パロワ』におけるよりも、人間関係はいっそう複雑なものになっている。そして、上図において人間関係が彼らの内部における葛藤の形をとって演劇的構成をとるのに対し（対話体小説）、下図においては、近親相姦テーマは三角図の外において行なわれ（また事実このエピソードは小説の外で行なわれるごとく取扱われている）、時空の拡がりという小説的構成を見せている（大河小説）。さてこのように、近親相姦エピソードをユダヤ的作中人物にまつわる二つの場合に限ってみると、ここでもまた

Klein の論説による照明が謎を解明してくれることになる。つまり彼の第三のテーマ「さまよえるユダヤ人とその娘」についての考察である。Klein はユダヤ女性に、典型的な女性美と母性的献身という純粋な一面と、その肉体的な美から発する娼婦的イメージというもう一つの面を認めるのだが、その後者の娼婦的性格から、ユダヤ女の父親の女衒的行為が生ずると述べ（ジュリアとヴォルズムートのジャンへの態度はそのように考えられないかどうか）、そこから娘の父に対する隷属性、ひいては父娘間の相姦テーマが生まれていることを指摘する。

A la souillure de la prostitution se mêle celle de l'inceste.

そしてこの近代における典型的な現れをバルザックやジロドゥーやクローデルとともにマルタン・デュ・ガールのなかに発見している。

Cet aspect incestueux, peut-être issu de certains tableaux bibliques aux mœurs primitives, est discernable dans d'autres images de Juives.

Il est associé à la relation d'Esther van Gobseck et du Baron de Nucingen. Dans Jean Barois de

Martin du Gard, il marque le portrait de Julia Woldsmuth dont son oncle est épris, et dans Les Tribault du même auteur, celui de Rachel Goepfert, dont le « protecteur », le sinistre et tout puissant Hirsch a d'autre part séduit sa propre fille.

すなわち、近親相姦テーマはいっぽう旧約聖書的世界（そこにこのテーマが原型としてあることは人も知る通り）への追憶からも来るものであり、それが必然的にユダヤ人テーマと結びつくと考えられるわけである。筆者はさきマルタン・デュ・ガールにおけるこのテーマの他の幾つかの場合を示して、そこに異国趣味のにおいが憑きまとうことを指摘したが、それはここで、旧約聖書的世界への追憶から東方への郷愁へ、そしてそれが広く異国趣味へと拡大された（これは西洋文学における一つの定石である）ものだった、と言いきることが出来るわけである。

以上すでに作品に則して詳しく分析したように、マルタン・デュ・ガールのいくつかの小説作品のなかにおいて、驚くほどの類型をもって、しかも独特なテーマとして執拗に繰り返されたこのユダヤ女（もしくは異国女）を含む三角図的構成とそれにまつわる異常愛慾のテーマは、ヨーロッパ人の精神内におけるわれわれの想像を越えるユダヤ的イメージへの郷愁と、意識的にしろ無意識的にしろつねに頭をもたげようとする潜在的な伝承との存在を強く訴えるものであることは、信じて間違いないものと思われる。

結び

フランス文学（或いは西洋文学）におけるユダヤ的要素、などという問題を無造作に取り上げたとしたら、われ

われはたちまちにあまりにも広域な、そして複雑で捕えがたい事象の迷路のなかに紛れ込み、そこに埋没させられるのを覚えるであろう。聖書からなにかの題材を得ているだけで、それはユダヤ的要素である。西洋文学におけるヘブライズムという問題が、おなじくそこにおけるヘレニズムという問題とともに、ヨーロッパ社会誕生とともにそこに流れこんだ二大潮流であって、それが抽出や分析を越えそれを拒否する、あまりにも根元的な性格と広汎な領域を擁する問題であることは今さら言を俟たぬところであろう。それは日本文学における仏教や古代中国思想という要素とおなじく、それを識別・論議することがむしろ向こう見ずな試みとなるような性質のものである。血肉となつたものを分離抽出すること自体が一つの誤謬であるとさえ考えられる。C. Lehmann が次のように述べる通りなのである。^(註9)

Cette fois, l'inspiration ne provient pas du dehors, mais du sein même de la France, de sorte que culture juive et culture française se rencontrent souvent dans le même homme et s'entremêlent d'une manière presque inséparable.

しかしいっぽうにおいて、西洋社会における一つの重要な歴史的事実として、いわゆるユダヤ人問題なるものも存在する。すなわち、西暦七十年パレスチナがローマ軍に征服され、イエルサレムが陥落して、ユダヤ民族の世界離散が始まって以来、各国における圧迫と解放の歴史、とくに今世紀のナチスのユダヤ人収容所という頂点をへて、新段階を画するものとしてのイスラエル共和国の誕生に至るまでの、迫害や疎外や差別感情や異国趣味などの長い歴史があるのであり、これは前述したようなヘブライズム的要素とは切り離して考え得るものである。そしてそれ

は、或いは顕在的に、あるいは潜在的に、さまざまの形をとって文学に反映されてきている。「ヴェニス商人」のシヤイロックから「失われし時を求めて」のスワンやラシエルだの、カフカの不安の根底にあるらしきものなど、いわゆるユダヤ人という状況の問題がここに含まれるわけである。

このように考えると、西洋文学におけるユダヤ的要素という問題は、およそ次のような三つの範疇に分けて考えるのではなからうか？ (註10) すなわちその第一は、冒頭に述べた西洋文化におけるヘブライズムという大テーマのなか

に含まれうる、西洋文化の血肉となっているユダヤ教的、キリスト教的要素である。そして第二のものは、その次に述べた、いわゆるユダヤ人問題という人種的・社会的要素である。これも地域的に広大な領域を含むが、第一のカテゴリのごとく、分離困難なものではない。そしてこのなかには、C. Lehmann が行なっているように、ユダヤ人作家によるものと非ユダヤ人作家によるものの別を設けることも出来よう。そして次に、この二つのものに加えて、そのどちらでもなくそのどちらにも関係する第三のカテゴリが考えられる。第三のカテゴリとは、たとえば本稿でもとりあげた「さまよえるユダヤ人」というテーマが象徴するように、神話に発しながら現代に生きつづけている特殊な伝承を含むカテゴリである。その重要な他の例の一つとしてカバラから発したオクルティスムスが文学に占める位置は見逃すべからざるものがある。オクルティスムスは事実現存するものであり、第一のカテゴリおよび第二のカテゴリと無関係ではないが、そのどちらでもなく別個に考察しうるものである。ゴールム伝説なども第三の範疇に入れられよう。

第一のカテゴリについては、前述したようにきわめて重要で本質的な問題であるために、西洋においては意識的、無意識にたえず文学研究のなかで、個別的、則応的に一種の教養として繰り返し注釈されているところである。筆者が問題とする第二のカテゴリについては常にある特定の意図に基づいてなす追求が想像されるのだが、とく

にフランス文学では意外にその分野が特殊化され狭められているという感じがする。C. Lehmann の *L'Élément juif dans la littérature française*, などの名著もあるし、最近には本稿にも重大な示唆を与えてくれた Luce A. Klein の *Portrait de la Juive dans la littérature française* などがあるが、そのほかには少くとも現代求められる範囲においては、あまり多くの研究を挙げることができない。もちろん今あげた研究のような総括的研究のほかにも、各作家や作品についての研究があるはずであるが、例えば前述の作者自身がユダヤ人であるプルーストについてさえ、とくにその面をとりあげて掘り下げた研究書はあまり無いようである。それにしてもドイツに劣らずこの点での要素の見られるフランスにおいて、これはどうした原因によるのであろうか？ Jean-Richard Bloch 研究から示唆を受けたばかりで未だこの問題について深く承知せず、ただこの問題をこれまで専門的に研究してきたマルタン・デュ・ガールに当てはめるといふ実験を始めたばかりに過ぎぬ筆者としては、憶測の域を脱しないのであるが、そのような研究が表立ってなされないところにこそ、この問題の、そしてフランスのユダヤ人問題の微妙な性格があるのであり、それはある立場を明確にするある特殊な研究者のある明確な意図のもとにしかなされにくいという、われわれの理解の届かぬ何かフランスの社会に現存するためではないかと考えられる。つまりゴビノーのようなユダヤ排斥の親玉を擁し、ドレフュス事件のごとく他国にも見られぬほどの大事件を起こす可能性を秘めながらも、中世以来大革命をへて現代にいたるまで、比較的ユダヤ人解放の政策を着実に進め、平等の精神を表看板としてきたフランスの事情がここに作用するのではあるまいか。我国のフランス文学研究においては、なおさらのこと、この点での研究は誠に微々たるものである。

つぎに第三のカテゴリーについて見ると、例えば十九世紀前半に作家たちを引きこんだオックルティスムスについて見ても、ネルヴァル、バルザック、ユゴー、ボードレールなどの作家についてドゥニ・ソーラ、ジャン・リシ

エその他のような博識な学者の貴重な研究がある。

さて本稿で採りあげたユダヤ的要素は以上三つのカテゴリーのうち、第二のものに属することは言うまでもない。マルタン・デュ・ガールの現代的小説に登場する現代的人物についての考察は、第一のカテゴリーや第三のカテゴリーに属する問題ではなく、マルタン・デュ・ガールがどのようにユダヤ人を作品に登場させているかということ、マルタン・デュ・ガールがユダヤ人をどう考えているか、ということと同じであって、これは明らかに第二のつまりユダヤ人問題というカテゴリーに属すると言ってよい。

筆者はマルタン・デュ・ガールのユダヤ人観をこの稿において徹底的にそして根本的に掘り下げ得たとは考えていない。それはこの作者が『ジャン・バロワ』という、ドレフュス事件についてフランス文学中でも最も正確であり注目すべき作品と言われるものを残したことで、充分説明のつくことではあるが、そのことを筆者はとくに本稿で強調したいと考えたのではなかったからである。筆者の意図は、第二のカテゴリーであるユダヤ人問題として出発しながら、しかも現代作家の現代小説における現代的作中人物を論ずるにつれて、この問題が必然的に第一・第二のカテゴリーに触れざるを得ない破目になる、という驚くべき現象、つまりわれわれ東洋人の推理をはるかに越えるこの問題の根の深さ、その奥行きを広さをこそ述べて、ジャン・リシャール・ブロック研究に手を染めて以来筆者の頭に住みついたフランス文学におけるユダヤ的要素、というものを考えるにつけての「一つの序章」とするところにある。

註

- 1、「さまよえるユダヤ人」という伝説は聖ヨハネ福音書第二十一章二十三の一文（恐らく「よしや我、かれが我の来るまで留まる

を欲すとも……」というくだり)に由来すると言われ、この個処の解釈から二通りの人物像が派生した。一つはキリストが十字架を背負ってゴルゴタの丘へ向かうとき、一瞬その疲れを休めようとして立ち止まった家の戸口で、そのキリストを追い出した靴屋がそれであり、そのとき、キリストが「私が立ち帰るまで汝はさまよい続けねばならぬだろう。」と答えたことになっている。その第二のものは、ピラトの館の門番で、キリストがユダヤ人たちの群衆によって連れて行かれるとき、やはりその館の前で一瞬立ち止まると、門番はキリストの顔に拳固をくわせ、立ち止まるな歩け、と言う。キリストは厳しく彼を見つめて「私は行く、しかし私が戻るまで汝は待たねばならぬだろう。」と言う。どちらにせよそのときそのユダヤ人は三十才ぐらいだった。以後彼は年をへるにつれ力弱くなり、死にそうになりながらも、また回復して、永遠にさまよい続ける。この伝説は中世に大流行し、それがイギリスの Mathieu Paris によって十三世紀にその *Historia Major* に採り入られた。このテーマはヨーロッパ全土に見られると言ってよく、Paris や Philippe Mouskes, Roger de Wendover では Joseph というピラトの門番になり、イタリアでは Butades、フランドルでは Issac Lakedem などという名、また宗教劇の人物としては、Malc もしくは Malchus と呼ばれたが、十六世紀に Ahasverus という名前をもってドイツに姿を現した。これは一六〇二年 Chrysostomus Dudulaeus (Duduloeus?) によって書きとめられており、その Chrysostomus の師である Schleswig の司教 Paulus von Eligen が一五四七年にハンブルクでアハスヴェールスに出会い、彼自身の口からその話を聞いたと語っているものようである。以後ドイツ文学ではこのテーマについての作品がとくに多く見られる。アハスヴェールスをカインと同一視しようとしたというオーストリアのローベルト・ハマリングの「ローマのアハスヴェールス」(一八六六)、それにゲーテの未完の叙事詩断章「さまよえるユダヤ人」(一八三六)、アダルベルト・ラオン・シャミッツの「新アハスヴェールス」(一八三一)などのほかシラーにもあり、その数は三〇を下らない。ゲーテの場合には彼がドレーステンに一七六七年滞在したときの家の主人である靴屋がアハスヴェールスのモデルとなったと言うが、シュトルム・ウント・ドラング時代からその心を探っていたわけである。そしてゲーテの場合、靴屋で職匠詩人のハンス・ザックスも頭に浮かべていたのではないかと言われる。この伝説にことにロマン派の人びとが魅惑されたいことは想像に難くない。フランスでも本文中にあげたもののほか、ロマン派のウジェーヌ・シユールの新聞小説 *Le Juif errant* (一八四四―四五)が重要であり、ほかにもアレヴィのオペラや、アポリネールの *Le Passant de Prague (l'Hérésiarque et Cie)* (一九一〇)などがある。

2、拙訳「生成」(法律文化社)より。

- 3、拙訳『文学的回想』（法律文化社）中の拙文「マルタン・デュ・ガールの作品について」より。
- 4、拙訳『生成』より。
- 5、ユダヤ女性が美化されるのは、聖書に現れる絶世の美人のイメージとともに、ほかに、女性は男性と違ってキリストを虐げなかったという伝説が幸いしている。
- 6、エステルはペルシヤの王アハシユエロスに見染められ妃となつて、迫害されんとしたユダヤ人たちを王の力により救わせたユダヤの絶世の美女（エステル書）。絵画や彫刻に好んで表現されたが、文学ではラシーヌの三幕合唱付き宗教劇（一六八九）などが有名。
- 7、ラケルは創世紀第二十九章：に出てくるユダヤの美女で、ラバンの娘。ヤコブがラケルの美にうたれて結婚を願う父親のラバンに申し込む。そしてそのためにヤコブはまず七年間ラバンに仕えることになる。しかるに七年をへたとき、ラバンはヤコブに美しいラケルの代わりに目の弱い姉のレアを与える。ラケルと結婚するためにはなお七年間仕えねばならない。ついにヤコブがラケルを得てその七年後にラバンから離れ、カナンカナンの地に帰ることができたとき、ラケルは父の偶像（テラフィム。家庭守護神の像で、これを持つことで遺産相続にあずかれる）を持ち去る。ここにも三角図の原型が見られる。
- 8、『チボー家』のもう一つの近親相姦的なテーマ、つまりチボー家の兄弟と妹同然のジゼルとのエピソードにおけるイギリスというのも気になってくる。
- 9、C. Lehrmann: *L'Élément juif dans la littérature française.*
- 10、この点 C. Lehrmann は次のような三つの範疇を設けている。
 - a) *L'influence de la Bible, des thèmes et des œuvres juifs sur les auteurs chrétiens.*
 - b) *Les œuvres d'auteurs juifs (ou partiellement juifs), si leur œuvre est empreinte d'une note juive.*
 - c) *Le problème politique, religieux et social que pose, au cours des siècles, la présence des juifs parmi les chrétiens, et l'attitude des auteurs non-juifs devant ce problème.*

参 考 文 献

- C. Lehrmann : L'Elément juif dans la littérature française (Editions Albin Michel, Paris, 1961).
- Luce A. Klein : Portrait de la Juive dans la littérature française (Nizet, Paris, 1970).
- Robert Gibson : Roger Martin du Gard (Bowes & Bowes, London, 1961).
- David L. Schalk : Roger Martin du Gard, the novelist and history (Cornell University Press, Ithaca, New York, 1967).
- Albert Camus : Roger Martin du Gard, Préface des Œuvres Complètes de Roger Martin du Gard (Editions Gallimard, Paris, 1955).
- R. M. G. : Œuvres Complètes de Roger Martin du Gard (Editions Gallimard, Paris, 1955).